



ブレインストーミング
グ会議・成果集



00前書きのようなもの

ブレインストーミング会議・成果集を閲覧していただきありがとうございます。

この本を手にしていただいたということは、物語を作ることに何かしら興味を持って下さっている証拠です。このブレインストーミング会議の内容を簡単に説明しますと、メンバーがそれぞれアイデアを持ち寄り、自由に組み合わせることで、机の前でひとりで唸っているだけでは思いつかないようなストーリーを、お互いに助け合って生み出そうというものです。

つまり、大勢でひとつの物語を作るのではなく、大勢でたくさんの物語をつくるのです。

あるひとはダメだと思っていたアイデアが、別のひとから見れば素晴らしいアイデアかもしれない。

単独では物語に結びつかないアイデアでも、他のアイデアと組み合わせることですばらしいストーリーが生まれるかもしれない。

アイデアの本質とは、異質なものの組み合わせといわれます。

その異質な組み合わせを、共通の目的を持つ仲間という触媒を得て、活性化させようというのが、ブレインストーミング会議の主旨です。

一人が得するのではなく、だれもがWin=Winの関係になれる手法です。

さて、結果ですが、感動ストーリー大募集では龍淵灯さんが優秀賞を獲得し、茶柱文学賞では私（齊藤想）が佳作を受賞しました。

いきなりの連続受賞ですから成果としては大成功です。

ですが、いまの手法が完璧というわけではありません。

まだまだ改善すべき点がたくさんあります。至らない点を少しずつ埋め、また逆に不要な部分は削り、回数を重ねるごとに完成度を高めていければと思っています。

これからも改善を続けてきます。

次回ブレインストーミング会議を開催するときは、ブログやメルマガで連絡しま。

そのときに、手を上げていただけると嬉しい限りです。

みんなの力で、よりよい創作手法を探していきたいと思います。

それでは、ブレインストーミング会議成果集をお楽しみください！

【サイトーブログ】

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

【サイトーマガジン（メルマガ：無料）】

<http://www.arasuji.com/saitomagazine.html>

01感動ストーリー大募集：公募紹介

株式会社CMサイトが、5分以内のアニメになる感動ストーリーを募集しています。

【主催者HP】 <http://www.cmsite.co.jp/kandou/oubo/>

この公募の魅力は、なんといっても短さです。制限文字数は600文字程度。たったの原稿用紙1枚半。実話、創作を問いませんので、ワンアイデアやひとつの名言で書き上げることができる長さです。主催者HPを見ると、参考プロットと実際に製作されたアニメ（3分半）を見ることができます。キラリと光るアイデア、泣ける経験をお持ちの方は、ぜひとも応募してみてください！締め切りは6月30日、制限文字数は600字程度です！

《募集要項抜粋》

募集内容：募集内容感動チャンネル向けストーリーの脚本・プロット

応募締切：2013年6月30日 必着

制限枚数：600文字程度

最優秀賞（1編） 賞金5万円、アニメ化

優秀賞（1編） 賞金3万円

佳作（1編） 賞金1万円

その他：応募はword、txtファイル、縦書き・横書きは問わず

作品表紙に以下の情報を記載すること。作品タイトル、ニックネーム（作家名）、氏名、年齢、住所、電話番号、メールアドレス

応募先：株式会社CMサイト 応募係 oubo@cmsite.co.jp

02感動ストーリー編のスケジュール

ブレインストーミング会議 感動ストーリー編のスケジュールは以下のとおりです。

【感動ストーリー：スケジュール】

- ・第1週（5/11～5/17）

各自で感動した実話（2～3行程度）を1つ以上提供する。

- ・第2週（5/18～5/24）

各自が提供した感動話を別の話にする（アイデアの提供）。 ブレインストーミング用オリジナルシート（注1）を元にアイデアを出していく。

- ・第3週（5/25～6/1）

みんなのアイデアのうち、気に入ったアイデアを発展させて簡単なあらすじを作成する。自分の作ったアイデアでなくてもOK。アイデアは共有物とする。

2つのアイデアを組み合わせるのもあり。

アイデアの内容を必要な範囲で改変するものあり。

できるだけ複数個作成する（量が質を確保する）。

- ・第4週～締切まで（6/2～6/30）

プロットの応募なので、どのあらすじを元にして応募するか各自で宣言して、応募する。

他人のあらすじを作品化するときは、作者の了解を得ること。

- ・応募終了後

応募作品をみんなで公開して反省会を開催。 結果が出たら、作品集として電子書籍にまとめる。

（注1）オリジナルシートはまだ暫定版ですので、参加者のみに配布しました。

03龍淵灯『一隅を照らす』（アニメ化）

龍淵灯さんの作品は見事に優秀賞を受賞されました。

受賞作がアニメ化されましたので、こちらのページでお楽しみください！

【CMサイト 感動チャンネル】

<http://www.cmsite.co.jp/kandou/ichiguu/>

《龍淵灯さんの受賞コメント》

感動ストーリー大賞において、提出作品「一隅を照らす」で優秀賞を受賞することができました。ブレインストーミングの技法を主催した齊藤先生のはもちろんのこと、一緒に知恵を出し合い校正に協力してくれた皆様に感謝します。

今回のブレインストーミングの技法は、ひとつのアイデアが8倍にふくれあがる優れた方法で、掌編や長編のプロット作りにも活用しています。今後もますます精進していきたいと思います。

《終わり》

※著作権の関係で本文を掲載できないことをご了承ください。

【龍淵灯：小説家になろう】

<http://mypage.syosetu.com/298835>

04sima 『メビウスの輪』

[レンジで温めてください]

花屋で働く私の朝は早い。

食卓にメモを残して市場へ向かう。

[レンジで温めてください]

研究職の夫は帰宅が遅い。

夕食はほとんど別で、小さな紙きればかり重なっていく毎日。

忙しくてすれ違う。すれ違うから会話は減って、互いを気遣う

優しささえ失って……。さらに仕事に没頭していく。

堂々めぐりだった。まるでメビウスの輪みたいに。

通勤途中の公園でいつも目にするのは、老人が犬に話しかけて

いる光景だ。犬はまるで人の言葉を理解しているかのように、

黒い瞳で老人を見つめている。

「犬はな、愛された分だけ愛を返してくれる」

私は老人と話すようになり、犬に話しかけるようになった。

ある夜。偶然、公園で犬に話しかける夫の姿を見た。

黒い瞳に向かって、夫はとつとつと語っていた。

仕事のこと、夫婦のこと、自分の不器用さ、未来について。

それは夫の心の声だった。

どうして私たちはちゃんと向き合って、自分の脆さや淋しさを

さらけ出さなかったんだろう。

次の日、私は夫に提案した。

「1週間の半分は、一緒にご飯食べよう」

日曜日、珍しく夫が私を散歩に誘った。

公園では老人と犬がくつろいでいる。

「あんたら知り合いだったか？」

夫は不思議そうに私と老人と犬を見る。曖昧に微笑んだ。

最近、休日は二人で公園に出かける。

私たちは今もやっぱり、あの犬に話しかけるのが好きだけど。

それ以上に、夫も私も互いに向き合うようになった。

優しさには優しさがかえってくる。愛したぶんだけ、愛される。

メビウスの輪みたいに――。

犬が教えてくれたのは、そんな当たり前のことだった。

05 関口元『僕たちの練習』

二年になったら、急に勉強が難しくなった。九九が覚えられない。僕はそのイライラを、どもりの勝をいじめることで解消していた。

「黙ってないで、『返せ』って言うてみろ。言わなきゃ、このカバン、返さないぞ」

「か、か、か……」

ある日の帰り道、いつものように悪ふざけしているとき、勝のおばあさんに会った。

おばあさんは、にこにこ笑いながら、僕たちに話しかけてきた。

「最近、勝が頑張って話しかけてくれると思ったら、君が練習につきあってくれていたのね。ありがとう、またよろしくね」

僕は、突然、いままでのことがはずかしくてたまらなくなった。

家に帰る途中、本屋に寄って、どもりを直す方法の書いてある本を探した。

次の日の掃除の時間に、僕は、勝に話しかけた。

「勝、最初に、言いやすい『あー』をつけるといいらしいぞ。『あー』って言うてから、昨日の『返せ』を言うてみるよ」

「あー、あー、あ、か……か、か、か」

みんなはいつものように笑ったけれど、僕は笑わずに、苦手な九九の八の段を大きな声で言った。

「八一が八、八二、一六、八三……」

いつもと同じところで躓くと、みんなが笑ったけれど、勝は笑わなかった。

「勝、一緒に練習しよう」

僕がすらすらと九の段まで言えるようになる前に、勝は、教室で手を上げるようになった。

まだ少しもっているけれど、僕もみんなも、もう笑わない。

僕は、学校が少し、好きになった。

【関口元：ゲンノブログ】

<http://hsblog.cocolog-nifty.com/gen/>

06自称隊長『いつもの日常』

太郎は定年を迎えた頃から柴犬・ムクを飼い始めた。子供達は既に独立し寄り付かない。ム妻と二人きりの侘しい生活を紛らせてくれるムクの散歩は妻に任せきり。気が向いた時に可愛がる他はゴロゴロしていた。

その日の起床後、朝食の横に、愛犬と過ごす日帰りツアーにムク同伴で参加すると記した妻の置き手紙を見つける。手紙を破り捨て、不貞寝しようとしたが眠れない。パチンコで気を紛らせようと外出する。直後、呼び出し音が鳴り、留守電が応答する。

パチスロの遊び方を尋ねた店員の横柄な態度に立腹して店を出、バーで泥酔する太郎。

路上で酔い潰れる太郎に迫る影。ムクだった。吠えながら袖を懸命に引っ張るムクに胸騒ぎを覚え、慌てて帰宅する太郎。留守電を聞き、妻がツアー中に行方不明になった事がわかる。

妻を軽んじていた事を悔やみ、無事なら夫婦旅行に行こうと誓う太郎。タクシーで妻が行方不明となった道の駅へムクと向かう。ツアコンの話では、近くの山を散策中に行方不明となり、深い闇と霧で搜索が難航しているという。ムクは、駐車場周辺を、何かを知らせるように吠えながらうろうろする。

駐車場を探すも妻は見つからず、あきらめかけた時、道の駅に妻から電話が入る。バスを間違え、遠い場所で降ろしてもらい、深夜バスを乗り継いで夜明けにようやく自宅へ帰宅したのだ。留守電で大騒ぎになっていると気づき、慌てて連絡をしたのだ。

旅行はやめだ。俺がそばでささえてやらなきゃ、それどころじゃないと考える太郎だった。

【自称隊長：楽に生きよう】

<http://kaw-jeep.blog.so-net.ne.jp/>

07自称隊長『友也と翔太』

小学4年生の友也が転入してきて2ヶ月経ったある日、腹痛を理由に欠席する日が続いた。心配した担任の松永が電話した所、学級で「KY」と仇名され、首謀者が翔太であることがわかる。

翔太はキレやすい性質で敬遠されがちな子だった。早速翔太を呼び指導するが「あいつがそう言わせるんだ」とキレて暴れ出した。気に入らないとすぐ暴れるから皆と仲良くできないんだ、と諭しながら、ある疑問を浮かべる松永。翔太自身も周りから浮いているのに、なぜこの件では皆が友也をいじめるのか？翔太は無関係かもしれない。

友也の言動を振り返ると、グループ活動中、自分だけ松永の近くに来て話し続ける様な、自分勝手な言動が目立つ事に気づく。翔太の命令ではなく、周りが翔太を変だと思って無視しているのだと気づいた。ASDかつADHD的な特性に対応した支援を行うことにする。

松永は友也の特性を学級に説明し、頓珍漢なことをしている時は優しくアドバイスするよう頼んだ。意見箱を設置し、子どもの権利条約を利用して人権教育を行い、不登校もその子自身の選択と尊重し、学校の受け入れ体制だけは整えた上で、クラスから友也への注文を匿名で記した手紙を集め、手紙を翔太と一緒に友也の自宅へ持参した。「誤解されやすい者同士、楽しいクラスを作るために力を合わせよう」と伝えたらどうかと松永が翔太を説得したのだ。

1ヶ月後。自宅に迎えに来た翔太を笑顔で出迎える友也がいた。

【自称隊長：楽に生きよう】

<http://kaw-jeep.blog.so-net.ne.jp/>

08 齊藤想『できることを、できるだけ』

初めての子育てはとまどうことばかりだ。

生後3ヶ月になる娘は抱いても、ミルクを飲んでも泣き止まない。育て方がわからない、といったら母親失格だろうか。

自宅は旦那の仕事の都合で選んだ郊外の一軒家。近隣に知り合いはひとりもない。まだ田畑が点在しているこの地域には、様々な生き物が庭に迷い込んでくる。

干からびたミミズを運ぶクロアリ。花に潜るアシナガバチ。器用に羽虫を捕まえるツバメ。みんな、完璧に子育てをしている。

それにひきかえ、私はどうだ。赤ん坊のあやしかたすら分からない。社会人時代は精密機械と呼ばれたほど正確かつ迅速に仕事をこなしていたのに、家庭に入った途端ににこありさま。子供なんて作らなければよかった。

あれ、と思った。

ツバメに狙われていた羽虫がまだ飛んでいる。ツバメの狩りは失敗したらしい。クロアリはミミズを落とした。アシナガバチの頭は花粉だらけで、困ったように前足で花粉を落とそうとしている。

そうだ、みんな失敗するのだ。私の母だって、思い返すと、失敗ばかりだった。

ツバメは再び羽虫を追いはじめた。クロアリは落としたミミズを持ち上げようと踏ん張る。アシナガバチは、次の花を目指して飛び立った。みんな、自分なりに努力している。

電話が鳴った。受話器を上げると、母親の声がした。

「たまたま近くに寄ったから」

なんてことはない。来たいのだ。

いいよ、待っているから。まずは、できることを、できるだけ。そう思い直すと、私は泣き続ける赤ん坊を、あやし始めた。

【齊藤想：サイトーブログ】

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

父親は苦勞して小児科医を開業しただけに、厳格なひとだった。地域のためだと、父は息子に医者継ぐように強要した。

しかし、少年には夢があった。「高校卒業までに結果を出さなければ、家業をつぐ」ことを約束し、少年はプロ野球選手を目指すことにした。父への反発もあった。

少年は小学生のころから努力を惜しまず、中学でそこそこ活躍し、全国的に名の知れた全寮制の名門高校に滑り込みで入学を果たす。だが、甲子園常連高の壁は厚く、プロを目指すどころかレギュラーすら夢のまた夢。試合に出たのは、ただの1試合。しかも練習試合のときだ。

少年の役目は、用具の手入れと、グラウンドの整備と、寮の管理と、仲間の応援だった。惨めだった。父と顔を合わせたくなかった。

最後の夏が終わり、高校の下宿先から戻った息子に父は言う。「結果を出したな」 いぶかしげに首を捻る息子に、父は温かく言う。

「競争に負ける辛さも悲しみも、そして、ひとのために努力する喜びも知る立派な人間になったじゃないか。チームが負けたときにスタンドで流した涙は嘘ではあるまい」

父はポツリといった。

「それにしても、あの三振は見事だった」

それは、少年がただ一度だけ出た試合のことだった。父は多忙な仕事の合間を縫って、息子のことをずっと見守っていたのだ。父の小児科医が評判になる理由を始めて知ったような気がした。

そして、少年は自分の意思で小児科医を継ぐことを決める。父を超える小児科医を目指して。

【齊藤想：サイトーブログ】

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

10茶柱文学賞：公募紹介

袋井茶文化促進会が、お茶に関する短編小説を募集しています。

【主催者HP】

<http://www.distance-i.co.jp/chabashira/concept/index.html>

主催者HPを見ますと、以下のようなことが書いてあります。

「茶の世界」を学び、どのようにしてお茶の消費を伸ばしていくのかを考える。講義を通じてお茶の歴史や文化を知り、未来に残すための知恵を出し合いました。この時、マーケティング戦略やデザイン案にまぎれて、一編の小説が提出されたのです。私たちはこの一編に大きな可能性を感じました。私たちにとってお茶とは何か。その答えを求めて、文学賞を立ち上げました。

この小説は主催者HPで読むことができます。

ここから想像しますと、お茶に対する思いだけでなく、マーケティングにも活用できる作品が求められているのではないかと。お茶の消費を伸ばしていく、お茶文化を活性化する作品、そのような文学を探しているのかもしれない。

締め切りは8/31、制限文字数は4000字です！

《募集要項抜粋》

応募締切：2013年8月31日 当日消印有効

大 賞： （1編） 賞金3万円

優 秀 賞： （2編） 賞金1万円

佳 作： （数編） お茶セット

※入賞者は「世界お茶祭り2013」にて表彰予定

募集内容：茶を材料とした短編小説

※原稿の頭には、題名・氏名・性別・年齢・職業・郵便番号・住所・電話番号を明記、各用紙に、ページ番号を振ること

制限枚数：4,000文字前後

応募先：〒437-1101 静岡県袋井市浅羽1246-5

袋井茶文化促進会 茶柱文学賞 TR係

11茶柱文学賞：スケジュール

ブレインストーミング会議 茶柱文学賞編のスケジュールは以下のとおりです。

【茶柱文学賞：スケジュール】

第1週（5/11～5/17）

勉強期間として、各自でお茶の本を1冊以上読む。

第2週（5/18～5/25）

「お茶」をテーマにして、ブレインストーミング用オリジナルシート・その1（注1）を元にアイデアを出していく。

第3週（5/26～6/1）

みんなのアイデアのうち、気に入ったアイデアを発展させて簡単なあらすじを作成する。自分の作ったアイデアでなくてもOK。アイデアは共有物とする。2つのアイデアを組み合わせるのもあり。

アイデアの内容を必要な範囲で改変するものあり。

できるだけ複数個作成する（量が質を確保する）。

第4週～締切まで（6/2～8/31）

第3週で出てきたあらすじのうち、自分が気に入ったあらすじを作品化する。他人のあらすじを作品化するのもOKですが、作者の了承を得ること。

応募終了後

応募作品をみんなで公開して反省会を開催。結果が出たら、作品集として電子書籍にまとめる。

（注1）オリジナルシートはまだ暫定版ですので、参加者のみにお配りしています。

12 齊藤想 『技術官僚の夏』

受賞作のため著作権が茶柱文学賞側にあります。

そのため、受賞コメントのみ掲載します。ご理解をお願いします。

《受賞コメント》

茶柱文学賞で佳作をいただきました。ありがとうございます。

【主催者HP】 <http://www.distance-i.co.jp/chabashira/concept/index.html>

茶柱文学賞で応募した作品は『技術官僚の夏』です。簡単に内容を説明すると、惑星間移住を目指す国際チームの荷物に”茶の種”を無理矢理押し込もうとする官僚の話です。この基本ラインに、茶に関する説話や、茶の効用など、お茶に興味を持ってもらえるような仕組みを押し込みました。

本作はぼく一人の力で思いついたストーリーではありません。メルマガ等で募集した『ブレイントーミング会議』でみなさんからいただいたアイデアが組み合わせ、感想をいただき、そうした過程を経て初めて完成させることができた作品です。また、ジャンルは得意のSFにしました。審査員のメンバーからすると受賞に近いのは純文学風ではないかと思ったのですが、自分の実力を最大限活かすためにあえてSFに拘りました。自分で納得のいく作品を応募したかったので。

公募に際して、主催者側の意向を最大限汲むか、自分の得意分野で攻めるか、二つに分かれると思います。ぼくの場合ですが、主催者側の意向がはっきりしていれば、傾向と対策に基づいて書きます。賞が立ち上がったばかりとか、意向が不明な場合は、自分がいいと思った作品を出します。今回は主催者側の意向が”お茶の販売促進”と明確でしたが、希望ジャンルが不明確だったので、”お茶の販売促進に繋がるSF”という、自分の趣味をミックスさせた作品を出しました。それが結果として良かったのかな、と思います。

《コメント終わり》

授賞式の様子はブログにUPしました。

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2013-11-10>

【齊藤想：サイトーブログ】

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

13紫仙『泡沫の銀河』

「痛っ」

思わず鳩尾の辺りを抑える。最近、度重なる痛飲で胃が痛いのだった。

蒸し暑い熱帯夜の中、遠くに見えるネオンサインや電子看板が、アルコールと熱した空気で火照った俺の頭上を埋め尽くす。ようやく俺は、繁華街の喧騒からは幾分離れた場所まで来ていた。ちょうど、休むのに手ごろで寂しげな公園が視界に入ったのだった。

「せっかくだ。ここで休むか」

俺はベンチにどっかりと腰をおろし、俯き加減になって重いため息を長々と吐き出す。体を休めて一時の高揚した気分は徐々に冷めていった。嘔吐のようなため息を吐き終わると、俺は胃液のような苦酸っぱいつばを飲み下し視線を地面から上げた。

つい先ほどまで、この公園に人の気配などしなかったはずである。そこには一人の老人が飄々と佇んでいたのだった。老人の髭と髪は伸びきり衣服は薄汚れていた。そのみすぼらしさに思わず眉をしかめそうになったが、老人の人懐っこい笑顔が俺の警戒の念を押し除けた。

「なんだ、飲み過ぎたか？情けない」

老人は、笑顔を浮かべたまま俺の肩をパンパンと軽快に叩く。公園にホームレスが寝泊まりすることはよくある。この老人もその一人なのだと思いついた。それはそうとして、いま背中を叩くのをやめてほしい。一瞬収まりかけた吐き気がまた振り返ってくる。

「ええ、ちょっと飲みすぎまして、酔いを醒まそうとここで休んでいたんです」

「それはいかんのう」

老人は、考え込むように顎の無精ひげを撫で俺を見つめた。

「なあ、あんたボランティアに参加せんか？ちょうど明日12時過ぎ、この公園の向かい側にある土手が集合場所だ。ちょうど人数不足でなあ」

「はあ……」

いきなり何を言い出すかと思っていたが、どうにか吐き気を堪えている俺に老人の話の腰を折る気力はないのだった。

老人は、羽井陸雄と名乗った。羽井の話によれば、なんでも自分は町内会長を務めていて定期的にこの場所の住民や公園の利用者に声を掛けて、公園や街の清掃、はてはどこまで本当なのか自治体の地域振興プロジェクトとやらにも協力する立場にいるそう。羽井によれば今回、町内会が公園近くの河原や土手に溜まったゴミを拾う美化活動を募るも参加者人数が少なく、どうしたものかと夜の公園清掃を兼ねた散歩をしていたところ、孤独そうな酔っぱらいを見かけものは試しと声を掛けてみた。そんな経緯だった。

胡散臭いことこの上ない。

「なんでまたそんな……」

ボランティアなんて徒労を好き好んでやらにやならんのだ。とは言わなかった。喋るのも辛かった。俺は大抵一人で飲む、皆で飲むことが嫌いなわけではない。だが、日常の中で何もかも億劫だと感じるといつも一人で痛飲しては、誰ともかかわりたくない気分が全身からにじみ出てしまう。そんな、負のスパイラルに陥っていた。

「タダ働きはまっぴらと言う顔をしておる。なに、終わった後に一杯奢ってやる」

深く刻まれた皺が、含みを持たせた笑みを一層意味深にしていた。

俺は卑しくも最後の言葉に食指をそそられたが、同時に老人の勿体ぶった態度にむずかゆい苛立ちを思えもした。まるで、羽井はこれから起ることも俺がどのような答えを口にするかもわかっている風であった。

「それも、いつも飲んでいるものとは別格のやつだ」

それが、酔いつぶれた俺が今日聞いた羽井老人の最後の言葉だった。

それから先、俺の記憶は定かでない。が、こうして安アパートの布団の中で目を覚ましたところを見ると、無事に帰って来れたようだ。

あるいは、飲み過ぎて泥酔した挙句に変な夢でも見ただけか。

欠伸を一つ。今になってみればあの老人は自分が酔ってみた幻覚か夢ではないかとさえ思うのだった。今日は休日なので、このままふて寝して何日かぶりに怠惰な午前中をすごすでしょう。最近ではそんな怠惰が、俺にとって唯一のゆとりある贅沢のように感じていた。が、ふと目覚まし時計を見ると10時を過ぎようとしている時刻だった。

自分は行く約束した訳ではない。だが、あのときの羽井とかいう老人の言動がどこか引っかかった。例の土手まで一時間もあれば行けなくはない。が、本当に自分が酔い潰れていたせいで見た幻だったらと思うと、俺は少しだけ躊躇った。もっとも、あれこれ考えたところで疑念は晴れないので、結局すぐに行動に移ることにしたのだが。

外の空気は、予想通り湿気と熱気を大量に含んだ不快度指数と言う言葉そのものを感じられた。市営の鉄道を乗り替えて、最寄りの駅から歩いて約十分。うだるような暑さの中歩く距離が嫌に長く感じる。特に土手を昇る階段は、運動不足の俺にとってちょっとした地獄だった。

どうにか階段を上り切る。眼下の川面にギラギラと照り返す水銀じみた光がすでに汗だくで息の上がった俺の視界を遮った。

思わず短く呻き、片手で両目を庇うとあの声が聞こえた。

「おお、ちゃんと来てくれたか」

昨日と同じくいきなり目の前に現れ、土手の頂きに飄々と佇んで俺を出迎えているのだった。羽井の出で立ちは、髪も髭も綺麗に剃り落し、白いスポーツウェアを着込んでいた。あまりにさっぱりした出で立ちなので、一瞬人違いではないかとも思ったが、老人の口元に浮かぶ屈託のない笑みを見て間違いなくあの時の老人であると確証が持てた。

「はあ、夢じゃなかったんだな」

「何か言ったか？」

「いや、別に……」

俺は少しだけバツの悪そうに肩をすくめてみせると、羽井とともに河川側の土手坂を下り既に集まっている参加者たちの輪へ歩み寄った。

「随分集まったな」

「わしの仁徳と言う奴よ」

「ホントかよ」

みれば、輪の中は老若男女様々な人が集まっている。中には外国人らしい参加者も数人混じっている。

「さて、皆の衆。これから一仕事たのむぞ」

有象無象の参加者が、羽井の言葉にみな快く頷いていた。

この人たちも自分と同じく、仕事終わりの一杯のため集まったのだろうか？そう思うと、どこか納得できた。

俺もまた軍手とゴミ袋を手渡され、羽井老人にせつつかれ川岸へと歩いて行った。砂利とコンクリートで舗装された川べりに着くなり鼻を手で覆った。

昨日もそうだったが、今日は輪を掛けて湿気と熱気がひどかった。その上、ゴミで汚れた水辺の近くということもあって、その悪臭は形容しがたい嗅覚への暴力だった。

それにもめげず、俺は汗だくになりながら空缶にプラスチックの容器やら、花火の残骸やらをせっせと集め、軍手の甲で額の汗を拭う。

周りを見わたせば、羽井老人以下他のボランティアも甲斐甲斐しくゴミを集めている。皆、生き活きと動き回り中には楽しげにごみを集める家族連れもいる。

俺はしかめ面でゴミに向き合っている。

まるでこれは、自分の日常の縮図ではないか。今の俺は、職場でデスクの書類とにらめっこをしている俺自身だ。

いつの間にか俺は呼吸が浅く早くそして荒くなっていた。忌々しい雑事は早く終わらせていつもどおり酒に逃避してしまいたかった。

俺はゴミを拾い続けた。俺は雑事が終わった後の一杯を煽った時、心の垢も綺麗に洗い流し、泥のような眠りにつけるよう願った。

「ご苦労様」

羽井が俺に声を掛ける。

気が付けば、夕日が無骨な鉄橋と川面を朱に照らしていた。

「まあ、わしの誘いでわざわざ来てくれた訳だ、一番先にアンタに奢ってやる。みな悪いがそれでいいか？」

またしても、みな羽井の言葉に含みを持たせた笑みで頷く。

羽井老人の言葉に引っかかりつつも、俺は一度大きく息を吸って吐いて見せた。深呼吸のつもりだったが、何故か落ち着かない。

「まあ、待ってなさい」

そう言うや、羽井老人はテントの中に入っていった。俺は、その間水飲み場で手と顔を洗って羽井を待つつもりだったが、羽井はものの数十秒で帰ってきた。例の一杯を両手に抱えて。

「ほれ、お主の分」

「これは」

それは両手で抱えるほどの陶器の中に注がれた否、点てられていた。

侘び寂びをあらわす深い緑色が俺の網膜を引き寄せ、豊潤な甘さと渋みが融和した独特の薫りが、俺の鼻孔を優しげにくすぐる。

「どういうことだ。一杯奢るって……」

「酒を奢るとは言っとらんがな」

そう俺の眼前には、茶碗に点てられ優雅に泡立つ抹茶があった。

「文句は、飲み終わってから聞いてやろう」

俺は差し出された茶碗を両手で抱え、半ば強引に一気に飲みでもするかのように茶碗の縁を傾け飲み下した。

礼儀も作法もあつたものではない。

純粹に、疲れから解放されたくて本能的に煽った。

濃厚で熱い苦みと微かな甘いまろやかさに、体の芯から温かみを取り戻した気がする。

ゆっくり鼻から息を吸い込む。次にゆっくりそれを口から吐き出す。

何の変哲もない深呼吸だとそれ以前の俺なら思ったことだろう。

まるで、空気が体の隅々まで駆け巡って心の中に沈殿した靄を洗い流してくれるようだった。

「うまい」

言葉を漏らしていた時には、肩から腹の底にかけて体のこわばりは一気に抜けていた。

抹茶の美味のためだけではない、俺は愕然としていた。

この一杯の抹茶を口にしなければ、落ち着いてゆっくり呼吸をすることさえ忘れていた。自然と呼吸が深くゆっくりと落ち着きを取り戻していた。空気がこれほど美味しいとは。

「この一杯のために俺はここまでやって来たんだ」

羽井がしてやったりとした笑みを浮かべている。

「茶は人を忙しい日常から解放してくれる」

そう言って笑う羽井陸雄はどこか、達観した仙人のように見えた。

「な、大酒喰らって吐いちゃうだけがすっきりする方法じゃあるめえよ」

次の瞬間には、羽井老人の悪戯っぽいしわくちゃの顔が俺を笑っていた。集まった人々まで、それにつられてか俺に微笑んでくれていた。思わずはにかんで、まだ抹茶が残っている茶碗の中を覗く。瞬間、抹茶の泡一つ一つにボランティアに参加した人々の顔が映って見えた。

今ならば、なぜこの場で抹茶が出されたか分かる。こういう時に思い浮かべる言葉を、俺だって知っているから。

「一期一会。この一杯に出会えなければ俺は、それに気付けなかった」

「たまには忙しい世の中で落ち着きを取り戻してみるのもよかろう。一杯の茶を飲んでゆっくり呼吸するだけで、呼吸そのものさえ美味いと思える。ありがたいことだ」

辺りを見回せば、ボランティアの人々も思い思いにテントの中で茶を点て、茶を楽しんでいるのだった。そこに社会的な立場の違いや年齢、性別、国籍による垣根はなかった。まるで、虹色に輝く抹茶の泡はそれらの人々の人生の泡沫そのもので、茶碗の中は泡沫の銀河のように儂く煌めいて見えた。

俺の人生も茶碗の中の泡沫の一つとして煌めいているのだ。

俺は茶碗の中の銀河を飲み干した。羽井に空になった茶碗を差し出し、笑って見せる。

「ああ。この一杯の茶の為に、また何日か忙しく頑張ってみるよ……」

【紫仙:幻想書齋】

<http://gensousyosai.blog.so-net.ne.jp/>

14みこ『希望と願いのtea stem』

テラフォーミング計画を遂行するために火星に派遣される第3陣の発射予定日が一週間後に迫っていた。第一陣から隊員はすべて20代の若者ばかりである。

静岡県の茶農家柴田家は銘茶を産出するので、江戸時代から知られていた。当主由蔵の孫の翔太が、伴侶となるマリアを伴って基地から一時帰宅してきた。来週のいまごろ、翔太はマリアとともに生まれ育った地球から離れる。

「火星に旅立つ準備があるので、家族のみんなに会うのは今日で最後となります。お礼とお別れの挨拶に参りました。じいちゃん、父さん、母さん、大変お世話になりました」

翔太が畳の上に手を付いて挨拶をした。それまでなごやかだった空気が水を打ったように静かになる。庭で放し飼いにされている柴犬のゴンが甘えた声を出した。翔太がゴンと目を合わせると、ゴンのしっぽが扇風機のように激しく動いた。

「あんなにしっぽを振ったらちぎれそうだわ」

マリアの言葉にみながどっと笑い声をあげた。ゴンはよほど嬉しいのか、しっぽをさらに激しくふる。

誰かが涙を啜りあげる音が翔太の耳に響いた。

祖父の由蔵、父の太一、母早紀、兄健一とその家族が翔太たちのために集まっていた。母は俯いて涙を拭いている。翔太は気のせいか、母の姿を小さいと感じた。

「ご存じだとは思いますが、役目上、僕たちは二度と地球に戻れません」

母はついに泣き声を出し、畳の上に突っ伏した。

翔太は胸が苦しくなった。ふと、兄を見ると、健一が意思の強そうな目で頷いてみせた。

(兄貴は家のことは俺に任せろと言ってくれているんだ。ありがとう。頼んだぜ兄貴)

翔太は健一に向かってゆっくりと頭を下げた。

「翔太、おまえのために何かしてやれることはないか？ 遠慮なく言ってみろ」

由蔵の声が湿っぽくなりかけた雰囲気破った。翔太は今だと明るい声を出した。

「じいちゃん、僕とマリアのために、お茶を淹れていただけませんか」

マリアの視線を感じた翔太は「お茶、について語り始める。

「江戸時代から、僕の家で栽培した茶は幸運をもたらすと評判があるんだ。その時代の政財界の著名人たちが吉凶を占うために、当主を訪ねてくることが多いね。茶柱が立てば吉。茶柱によって、じぶんたちの方針を決めるようだ。つまり茶柱が日本の、いや、世界の政治経済を牛耳っていると言っても過言ではない……というのは言いすぎかな」

「面白い話ね」

自嘲する翔太に、マリアは誇らしげに寄り添った。

「若い二人のために、良いお茶を淹れよう。この日のために焙煎しておいた」

由蔵は床の間を背にして座っていたが、お茶を淹れるために立ちあがった。その際、ふらふらと身体が揺れた。

「じいちゃん、危ない」

「足がしびれただけだ。心配はいらぬ」

慌てて駆け寄った翔太の心配そうな顔を見て、由蔵が笑った。

「あとはあたしが……」

早紀は翔太の代わりに由蔵を支えた。そのとき、翔太の左手は早紀の右手に触れた。小さい手だったが、翔太はぬくもりを感じた。早紀が翔太を慈しむように見つめてきた。

「僕、母さんの子供でよかった」

翔太は早紀の眼差しに温かさを感じた。

「母さん、今まで育ててくれてありがとう。元気で暮らしてください」

翔太の言葉を聞き、早紀は由蔵から手を離し、畳の上で泣き伏した。

「こら！ 翔太。母さんを泣かすな。今生の別れみたいな挨拶はやめろ」

由蔵に睨まれ、翔太は肩をすぼめた。

「でも……。僕を見てもらうのは今日が最後なもの」

翔太は口を尖らせながら、ぶつぶつと呟いた。

兄嫁がワゴンにお湯の入ったポットと急須を載せて居間に入ってきた。

「それじゃあ、翔太とマリアさんのためにお茶を淹れるとするか」

由蔵は湯呑茶碗にお湯を注いだ。次に、茶筒を右手で取り、左手で蓋を外した。蓋の中に二人分の茶葉を入れた。湯呑茶碗の湯を急須の蓋をとり、中に流した。急須が暖まったところで、湯を脇に置かれた耐熱容器に捨てた。

妻となるマリアと共に祖父の淹れたお茶の入った茶碗を覗いた。

ところが、翔太の茶碗の中の茶柱は立っていなかった。どちらかといえば、気持ちよさそうに横になって浮いている。

「あれっ？ だめじゃん。茶柱、立ってない！」

翔太のパートナーであるマリアは驚いて口走った。

「大丈夫だよ、マリア。たまには、こういう結果になる場合もあるさ」

翔太は軽く笑って受け流した。しかし、翔太は内心とても気にしていた。ロケット発射が迫っている。もやもやした気分が出発したくない。

「もう一回、お茶を淹れてくれないか」

「バカ。占いは一回きりだ」

祖父はほほえみを浮かべ、茶筒を手渡した。翔太が蓋を開けると、中身は全て茶柱だった。茶葉どころか空気すら入っていない。よくぞここまで詰めたものだ。というより、なんだ、この茶筒は。

驚く孫に、祖父が言う。

「それだけあれば、何本かは茶柱が立つであろう。だがな、運を切り開くのは自分自身の力だ。茶柱に心を揺さぶられてはならん。おまえが火星に茶畑を作り、人々の心を癒すお茶ができたら、儂もうれしい。楽しみに待っておるぞ」

「じいちゃん、どのくらい長生きするつもりなんだ」

「儂は死なぬ。銘茶を茶柱ごと毎日飲んでおるからのう」

祖父はカラカラと笑った。祖父と合わせて、翔太とマリアも笑った。百年後もこうして“久しぶりだな”とか言いながら笑っていられるような気がした。

祖父の目にうっすらと涙が溜まっていた。

15自称隊長『カンパイ！』

茉莉は中学3年生の初日から配布された進路希望調査書を手し、両親にどう相談するか悩んでいた。茉莉の両親は、都内では希少な茶農家兼茶舗経営を家業としており、茶舗兼自宅の近隣に小さな茶畑を持っていた。

大学生の兄は、卒業後は家業を継ぐ予定だ。茉莉も将来は家業を手伝いたいと思っていたが、茶舗での接客業は極度の人見知りのため不可。茶畑の農作業も、父と兄が機械を使えば事足りた。何より、普段から兄ばかり可愛がり、自分には関心を持っていなさそうな両親から、お前には期待していないと言われることが怖くて、自分の進路を相談できなかった。

その頃、茶葉が炭疽病にやられてしまう。新茶販売まで1ヶ月弱。辛うじて3分の1弱の茶葉は無事だ。無事な茶葉を新茶にし、不足は代替品で補うか、全廃棄して全てを代替品で賄うか。3日以内に決断しなければ新茶販売の時期に十分な商品量を確保できない。

休み時間、同級生のみどりから、茶畑が伝染病になったのかと聞かれる茉莉。茉莉は涙を流して保健室へ駆け込み、腹痛を理由に早退。不登校となる。

両親と兄は、茶葉の全廃棄を決め、代替品の準備に忙しかった。そのうち学校に行くだろうと茉莉に干渉しなかった。

一週間後。みどりから謝罪の手紙が茉莉に届く。

みどりは悪くない。茶畑が家族でなら、自分は茶畑の中の病のような存在だと考え、落ち込んだ自分が悪いのだと返事しようとする茉莉。が、何度書き直しても納得いく文章が書けず、気分転換に深夜の倉庫を散歩する。隅に放置された茶木に目を止め、病にかかった茶葉の中から無事な茶葉をより分けて採集し、部屋に戻る。

採取した茶葉を煎茶にし、自分の気持ちを表現したイラストで短い動画を作り、自作の煎茶を添えてみどりへ送る。

2日後の朝。みどりは茉莉と一緒に見たいと、自作のアンサービデオを持参する。クラス全員が茉莉の作ったお茶を飲みながら動画を観て涙を流す様子、茉莉は病ではなく美味しい茶葉であること、皆が茉莉の帰りを待っていると励ます内容だった。

遅刻しながらも一緒に登校する茉莉とみどりを温かく迎え入れるクラスメートたち。

みどりと茉莉は、二人で作った動画をセットにしてyoutubeへアップする。数万回を超えるアクセス数を記録し、動画を見た人から、茉莉の茶舗に注文が殺到した。更に、広告代理店のマネージャーが、CMに動画を利用したいと申しこんでくる程の騒ぎになった。

茉莉の両親は、茉莉が大人しいのに安心し、話す時間を作ろうとしなかったことを謝る。心身ともに負担のかかる家業を、線の細い茉莉に継がせたくなかったのだと打ち明けてくれた。兄も、家の事は心配せず、好きなことに打ち込むようアドバイスしてくれる。

自分の作った映像を大勢の人が喜んでくれたことに勇気づけられた茉莉は、進路希望調査書に、映像関係の仕事に就きたいと記入した。

【自称隊長：楽に生きよう】

<http://kaw-jeep.blog.so-net.ne.jp/>

16後書きのようなもの〔今後の展開について〕

ブレインストーミング会議・成果集はいかがだったでしょうか？

前書きでまだまだ改善点があると書きました。

改善案については、いま（H26.1時点）考えているところですが、具体的にはアイデアを生み出す段階だけでなく、ストーリーにまとめる段階でも集団知を利用できないか、ということです。

ぼくが茶柱文学賞で佳作を受賞した『技術官僚の夏』という作品ですが、第一案をみんなに見せたところ、いろいろとご意見がでて、最初から書き直すことにしました。

これは修正といったレベルではなく、主人公も設定も全て変更しました。残したのは基本アイデアのみといっても過言ではありません。

ぼくが受賞できたのは、この書き直しのおかげだと思っています。

この受賞を、ただの偶然、ただの幸運で終わらせることはできません。この偶然を、システムとして取り入れることはできないか。

アイデアとストーリー作成の二段階でブレインストーミングを活用するようにすれば、より受賞率が高まるのではないか。

煩雑になることなく、より効果的にブレインストーミングを実施する。そのためにはどうすれば良いのか。そのようなことを、日夜考えています。

次のブレインストーミング会議をいつ開催するかは未定です。

しかし、必ず開催します。そのときには、またブログやメルマガでご案内いたしますので、ぜひとも皆様のお力添えをいただければと思います。

ブレインストーミング会議・成果集を最後までお読みいただきありがとうございます。

貴方の参加をお待ちしておりますので、ぜひとも次回のブレインストーミング会議では仲間になりましょう！みなさんの創作の助けになることを願ひまして。

平成26年1月

【サイトーブログ】

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

【サイトーマガジン（メルマガ：無料）】

<http://www.arasuji.com/saitomagazine.html>

17参加者募集のメルマガ〔参考〕

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

真剣に受賞を目指したい方に向けての新たな企画

ブレインストーミング会議 参加者募集

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

サイトーマガジン第58回と第59回の2ヶ月に渡り、自分の頭の奥で眠っているアイデアを強制的に発掘する方法、ブレインストーミングを紹介しました。

今回はそのアイデア発掘法を実際に活用して、公募で受賞を目指そうという企画です。

めざす公募はこのふたつ

【茶柱文学賞】（短編 8/31締切）

（公募紹介）

→<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2013-04-18-2>

（企画スケジュール）

→<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2013-04-24-3>

【感動ストーリー大募集】（600字以内 6/30締切）

（公募紹介）

→<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2013-04-18-1>

（企画スケジュール）

→<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2013-04-24-2>

参加人数ですが、それぞれぼくを含めて4人～5人を予定しています。期間が短いですが、参加希望者は5月9日までにぼく宛にメールを下さい。

この二つの公募を選んだ理由は、紹介したアイデア発掘法を活用しやすい公募ではないかと考えたからです。それぞれスケジュールが異なります。具体的にどのように進んでいくかは、ぼくのブログを参照してください（URLは上記参照）

参加者希望者が予定数を上回った場合ですが、申しわけありませんがこちら側で選考させていただきます。幅広いアイデアを求めるには、できるだけ一色に染まらないように、多彩な人たちに参加していただくのが良いと考えています。

そのため大変恐縮ですが、企画に参加を希望される方は、2～3行で結構ですので自己紹介をお願いします。過去の実績は関係ありません。もちろん秘密は厳守いたします。自己紹介がなくてもOKですが、参加希望者が予定数を上回った場合は不利になることをご承知ください。

今回、選考に漏れた方は、次回開催の際には優先してご参加いただこうと考えています。

ぼくにとっても、今回はひとつの挑戦です。

上手くいくかどうか、まったくわかりません。というか失敗する可能性が高いです。

どちらにしても、企画を通じて、新しい手法の発見、新しい技術の開発をしてみたいというのがぼくの願いです。

というような企画なので、教わるのではなく「一緒に何かを作り出したい！」というひとに参加していただくと助かります。

参加希望のメールはこちらまで！ 5月9日締切です！

saito@arasuji.com

(参加の可否については、決定次第メールいたします)